

世界の研究現場から学ぶ。



昨年12月11日-15日にアメリカのフィラデルフィアで開催された「アメリカ細胞生物学会(ASCB)」に、大学院生命科学部 甲斐研究室のメンバーが参加し、研究発表を行いました。

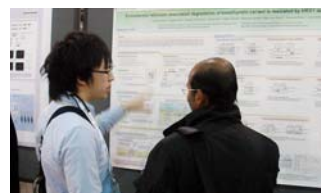
ASCBは、アメリカ全土からさまざまな分野の研究者が集まる、歴史の深い学会です。また、学会前には、テンプル大学とのジョイントシンポジウムが実現し、大学内の施設見学やディスカッションを行いました。

今回の学会には、研究者だけでなく、大学院生や普段はあまり参加できない学部生も参加しました。

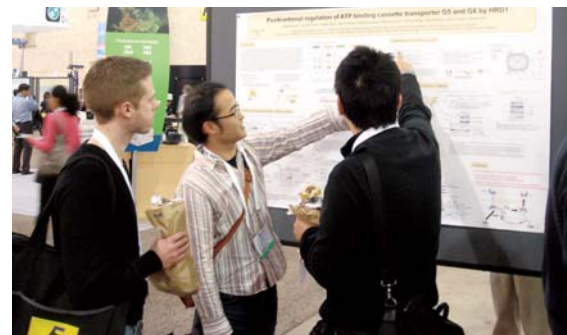
「学会には、文献でよく目にするような、有名な研究者も参加していて、ランチの時間になると、その人を囲む人ばかりができていたことには驚きましたね」と話すのは、海外に渡るのも初めてだった鈴木さん。積極的な海外の若手研究者を間近に見て、うまくコミュニケーションをとることで、知識の幅が自ずと広がっていくことを実感したといいます。

また学会中は、「ポストクになるため」、「キャリアアップするため」をテーマとした、若手研究者が対象のワークショップが開催されており、高い水準の研究者を生み出しているアメリカの核となる部分に触れることができました。

海外の研究者を取り巻く環境は、百聞は一見にしかず。海外の現場に刺激を受けることにより、さらにハイレベルな研究機関、世界に通用する熊本大学グローバルCOEを目指していきます。



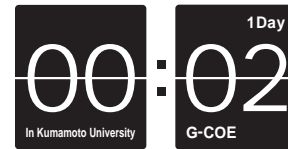
さまざまな研究者が集まる中、多様な質問が飛んでくる。考え方の幅の広さに驚かされた



学会でのポスターセッション。準備万端! で挑んだものの、質問の返答に詰まることも、でもこの経験で度胸がついた



テンプル大学でのジョイントシンポジウムの様子。この後は発表の内容についてディスカッションが行われた



研究者たちの一日

毎日、最先端の研究に取り組む、熊本大学グローバルCOEの研究者たち。コツコツとした日々の積み重ねが、大きな研究へとつながっています。そんな彼らは、どんな思いで研究を行っているのか、研究者の一日をのぞいてみましょう。



視機能病態学分野
G-COEリサーチ・アソシエイト
井上(餅田)みゆき
Miyuki Inoue-Mochida

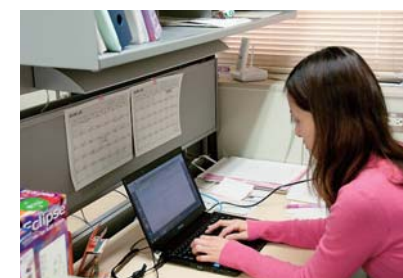
研究の世界に興味を持ち始めたのは大学4年生で、本格的には大学院の博士課程から分子生物学分野を知ることになりました。厳しい世界とも知らずに飛び込んでから15年が経ち、娘も生まれ、出産前とは全く違う環境で研究をしなければならない状況になりました。現在はEXT1の網膜幹細胞における機能解析を行っています。EXT1はさまざまな細胞の分化、増殖などに重要な機能をもっているプロテオグリカンを合成する機能を有しており、網膜の発生過程における機能も興味深いところです。

発生の研究をしていることで、娘が誕生したときは「遺伝子が機能してこういう形で生まれてくるんだー」ととても感激しました。その生命に対する感動や興味で、今も研究を続けている気がします。また、今まで研究が続けられたのは挫折しそうなときに支えてくれた仲間や先生方、G-COE(それに関わる先生方)、夫、視機能病態学分野教授の谷原先生との出会いがあってこそ、と日々感謝しています。

近年、男女共同参画運動のおかげで出産後も働ける環境が整ってきています。特にG-COE、そして私が所属している視機能病態学分野においては女性研究者や女性医師が多く、女性が働きやすい環境が整備されていると感じます。私自身もG-COE夏のセミナーに娘を連れて安心して参加でき、良い経験ができました。ただ現実的に、出産後は特に育児に時間が割かれるので、マンパワーに依存する研究成果を考えると、育児と仕事との両立を必ずしも両手を挙げて賛同できないリーダーもいるかと思います。ポジティブアクションがあって初めて育児もしつつ、研究に気兼ねなく参加できる環境につながるのではないかと感じている今日この頃です。



共用棟の最新実体顕微鏡を使ってマウス胎児から網膜を採取する



普段は専門の視機能病態学分野と共用棟を行き来している



ランチは唯一ゆっくりと食事ができる時間

